

『棠陰比事』の日本における受容と影響

周 瑛

【要旨】

『棠陰比事』は中国南宋の桂万榮が嘉定四年（一二一一）に裁判の役人の治獄のために編集した判例集である。鎌倉時代に朝鮮より日本に伝来し、儒学者である林羅山を初めてして、書写されたり注釈を加えられたりして、為政者や知識層乃至庶民の間で大いに反響を呼んだのである。その伝播の拡大は日本の近世文学に新風を吹き込み、重要な影響を与えた。即ち、その書名における「比事」に因んで日本で「比事物」、つまり裁判作品の創作がはじめられるようになる。元禄二年（一六八九）刊『本朝桜陰比事』、宝永五年（一七〇八）刊『鎌倉比事』、宝永六年（一七〇九）刊『日本桃陰比事』（上記改題改竄本、同年刊『本朝藤陰比事』）などがある（以下『本朝桜陰比事』を『桜陰比事』、『日本桃陰比事』を『桃陰比事』、『本朝藤陰比事』を『藤陰比事』と記す）。『棠陰比事』は一体どのようにこれらの「比事物」また他の裁判関係の作品に影響しているのだろうか。また、『棠陰比事』の影響が見える『板倉政要』と『桜陰比事』は日本で生まれた比事物として、それ以後誕生した「比事物」とどのような関連性があるのだろうか。

『棠陰比事』の日本における影響について研究されるとき、漠然と原典の『棠陰比事』、または『棠陰比事物語』が重要視されてきた観がある。そうした中で、滝田貞治氏は『桜陰比事』「御耳に立は同じ言葉」に挿入された系図の書法は『棠陰比事』でなく、『棠陰比事諺解』「傳隆議絶」の「語調」と似ていると指摘され、『棠陰比事』の注釈書に着目された。しかしそれ以外に関しては、特に考察されることはなかった。そこで、本論文では、『棠陰比事諺解』をはじめ、注釈書の『棠陰比事加鈔』や和訳本『棠陰比事物語』をも考察の対象としながら、『棠陰比事』の日本における受容と影響のあり方を考証する。

第一章、「『本朝桜陰比事』と『棠陰比事』の表現の一考察」では、『棠陰比事』、『棠陰比事諺解』、『棠陰比事加鈔』、『棠陰比事物語』と井原西鶴が著した浮世草子『桜陰比事』とを文章表現から比較し、先行研究に基づきつつ、その関連性の更なる究明を試みた。『桜陰比事』「小指は高くゝりの覚」、「仏の夢は五十日」、「御耳に立は同じ言葉」、「四つ五器重ての御意」、「曇は晴る影法師」は、それぞれ『棠陰比事』「趙和贖産」、「程簿舊錢」、「傳隆議絶」、「符盜並走」、「丙吉驗子」と、着想や設定において類似点を

持っており、更に細かい表現の設定までもが共通点を持っていることが窺えた。しかし、この五組の中で、『桜陰比事』は『棠陰比事物語』や『棠陰比事加鈔』とは必ずしも一致しない要素が見出されるのに対し、『棠陰比事諺解』とは全てに共通点を有する。『棠陰比事諺解』が『桜陰比事』における『棠陰比事』の受容にとって看過できない書であることが認められる。

第二章、「『板倉政要』をめぐる諸問題——『棠陰比事』と『本朝桜陰比事』とに関連して」では、十七世紀前半京都市政を司った京都所司代板倉殿の裁判話を集めた『板倉政要』が如何に『棠陰比事』から影響を受けたかについて考察し、『桜陰比事』との関わりも検討する。『板倉政要』「京六波羅ニテ夜盗町人ヲ殺害シ財宝ヲ取ル事」、「賀茂ノ禰宜養父養子出入之事」、「五器盗人之事」は、それぞれ『棠陰比事』「蔣常規軀」、「李傑買棺」、「趙和贖産」、「符盗並走」及び按語の部分に共通しているところが見える。『板倉政要』の『棠陰比事』から影響は先行研究においても指摘されるが、その具体相が一層明瞭となった。また、『桜陰比事』は直接に『棠陰比事』から影響を受けた以外に、『板倉政要』を媒介とし、『棠陰比事』の一部の要素を吸収した可能性が高いこともわかった。更に、『板倉政要』「買売物出入之事」は『棠陰比事諺解』「趙和贖産」の一例と一致しており、『棠陰比事』受容における『棠陰比事諺解』の重要性が改めて示唆される。

第三章、「『棠陰比事諺解』の特質について」では、第一章と第二章において取り上げた『棠陰比事諺解』の特質を考察する。『棠陰比事諺解』は慶安三年（一六五〇）に羅山が紀伊藩主徳川頼宣の依頼を受け著した書である。頼宣の法律への関心は、家康からの影響、藩政統治上における必要などが合わさった結果であったが、『棠陰比事』の注釈を羅山に依頼したことは、紀伊の法律学研究に基盤を築いた業績の一つと考えて良い。羅山は『棠陰比事諺解』において、文献を博搜し、法律用語には説明を加え、同一事件に対する異なる記述や類似する日本の事件を紹介すること等を通じて、様々な状況に対応する、現実的な裁判のあり方を為政者に提供する工夫を凝らしている。即ち、そこには的確・適切・平易な注釈態度が窺える。こうした姿勢は『棠陰比事』の堅い内容を噛み砕き、文芸世界へと普及しうる可能性を生じさせる。このような特質が『棠陰比事諺解』の文芸書への影響の背景として指摘できる。

第四章、「『板倉政要』の影響——『鎌倉比事』と『本朝藤陰比事』を中心に」では、『板倉政要』が『藤陰比事』と『鎌倉比事』に影響を与えることが確認できた。『藤陰比事』「女の不貞は世界の払ひ物」と『板倉政要』「入婿出入之事」はテーマに共通性が見られ

る。『藤陰比事』「非に似たる理を云立の浪人」と『板倉政要』「京ノ商民巾着ヲ切ル、事」では、裁判官が被害者に更なる不利益を被らせるという態度が同じであり、『本朝藤陰比事』「大赦に漏る自業の訴訟」と『板倉政要』「五器盗人之事」はプロットと表現の一部が一致している。『鎌倉比事』「石に根次分別の重さ」、「方角指北の針」は、それぞれ『板倉政要』「寝首搔士之事」、「瓢箪三子ニ譲事」の発想を逆転させて話を構成させており、更に、『藤陰比事』では素直に『板倉政要』の要素を利用するのに対し、『鎌倉比事』では板倉裁判におけるキーセンテンスに着目した反転の手法が認められた。こうした相違は、『藤陰比事』が裁判小説としてシンプルな形での庶民の教訓を意図したものであったのに対し、『鎌倉比事』は裁判小説の枠を超え、曲折に富むプロットで読者を楽しませようとする性格にもつながっている。

第五章、「『昼夜用心記』における因果について」では、北条団水が宝永四年に著した詐欺談『昼夜用心記』における事件の展開の特色について、論述形式としての「因果」に着目して検討した。『棠陰比事』が起こした『桜陰比事』などの裁判物ブームの中において、タイトルから「比事」を除いた『昼夜用心記』は、内容において事件のみを著し、裁決が施されない。しかし、『桜陰比事』の類話との比較を通じて、『昼夜用心記』の詐欺に参与する事物や人物の由来、つまり結果を導く「因」について、読者が納得できるように説明的に語られる傾向が認められる。こうした論述形式の因果関係の明確さに、テーマとしての因果応報の仏教精神をも反映させようとする意図も看取できた。説明的な「因果関係」によって物語のプロットは単純で起伏に乏しいものになるが、読者に教訓的リアリティを感じさせるものとなる。

本稿の検討を通じて、『棠陰比事諺解』は、日本における『棠陰比事』の受容過程において看過できない意義を持った書であったと言える。従来『棠陰比事』の影響に関する研究では、漠然と原典の『棠陰比事』や、その和訳本の『棠陰比事物語』が重要視されてきたが、『棠陰比事諺解』は為政者に提供する法律書としての性格とともに、的確・適切・平易な注釈態度が、文芸の世界への橋渡しとなった可能性が窺えた。しかし、『棠陰比事諺解』が流通したルートはまだはっきりと解明できていない。林家、紀伊藩、板倉家及びその三者に関わる政治圏・文化圏、また当時の書肆との接点については今後の研究課題となる。